
Have A Happy Holiday !

有里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Have A Happy Holiday !

【Nコード】

N7199Z

【作者名】

有里

【あらすじ】

サイトより転載。

現在連載中「赤羽館の住人たち」、神前丹と赤羽真咲ふたりのお話みなさんも素敵な週末をお過ごし下さい。

ツリーの点灯式だとか、街の並木や店頭のイルミネーションだとか、臨海公園の観覧車だとかタワーの夜景だとか、どこもかしこもクリスマス一色だ。

バイトからの帰り道、いつも自転車で見向きもせずに通り過ぎてしまう家々にも、煌びやかな光が電飾されている。

特にこの辺りは大きな一軒家が立ち並ぶ住宅街で、住人もそれ相応の富裕層な訳で、電飾する家はそれはもう派手に大々的にやっている（逆に、そういうものに全く手を出さない家もある）。時々そのイルミネーションを見物しに、人が集まっているのを見たことがある（時には勝手に庭に入り込んだりして、ちよつとした騒ぎになることも）。それに時間が遅くなると、ベタベタとくっ付きあつて甲高い声でお喋りするカップルなどは多分近所迷惑なんだろうけれど。

だけど毎回そこを通る度、なんだか微笑ましい気持ちになる。平和だなあ、なんて思うのだ。その家の住人が、一つひとつ思いを込めて飾り付けているのが分かるから。

それに冬の澄んだ空気は寒さも半端ないけれど、その分イルミネーションは殊更綺麗に見える。一瞬、ここがどこだか忘れてしまうくらい幻想的な気分にもなる。

赤羽館も、どうせあの大きな庭には一本くらいモミの木がありそうだし、色々飾りを付ければいいのに、なんて思った。それを暖かい談話室（そういえば談話室には暖炉があるんだっ！）の中から眺めて。そっぴやジュリア、ケーキ作らないのかな…ジュリアが作るのは甘過ぎなくて丁度良いんだけど。去年のクリスマスもバイトだったし今年もそうなりそうだけど、せめて美味しい物を食いたい

ものだ（ふん、村田とか大学の友達は大体彼女と過ごすって言うしな！）。

けれどいつだったか、ジュリアにクリスマススのことをぼろっと言ってみたら、呆れたような顔で、馬鹿ね、と言われてしまった。

「わざわざそんなことやる訳ないでしょ。それより、赤羽館（アカハネ）ではそんなこと他の人に言わないでよ。」

シンクで食器を洗いながら言うジュリアは、不満げな顔をした俺に一度目を向けて、また手元に視線を戻す。そして、はあ、と大袈裟な溜息が聞こえた後、ジュリアが手を拭きながら厨房から出てくる。

「あのね、宗教っていうのは、大勢の人間の犠牲から成り立ってるの。その中に、私達も含まれてる。それに …… ワラキアの王はその【宗教】に殺されたのよ。日本みたいにお祭り騒ぎの習慣しかないのなら知らないのも仕方ないけれど、…。」

苦々しげなジュリアの言葉が、重く響く。

俺は外国語を聞いてる時みたいに、反応が遅れた。

というか、どう返事をすればいいのか分からなかった。

【聖なる日】には到底似合わない物騒な言葉が並んでいて、一瞬、それらの言葉の意味が分からなかった。俺の中のクリスマスっていうイベントと、ジュリアの中のクリスマスっていう日は、言葉の意味からそれが指し示すものまで全部が違うもので、完全に噛み合わないんだ。

何と言ったらいいか逡巡するような顔付きで、ジュリアは食堂の大きな窓から外を見詰めていた。その横顔が微かに翳って、眉を寄せたのが分かった（きつとその顔を真正面から見たのなら、思い詰めるような暗い顔をしているだろう）。

「宗教で救われる人がいる半面、宗教が引き金になって戦争が起きて人が死ぬの。」

まるで現にそれを見てきたような哀しげな眼差しに、それでも凜とした声はなんだか印象的で、変に高揚していた俺の気分も、膨らんだ風船が萎んでいくように小さくなって消えてしまった。

「……丹、どうしたんだい？」

声を掛けられて、ハッとする。

目の前に真咲さんの顔があつて、俯いたまま黙り込んだ俺を気にするように見ていた。そのグレーの瞳は、今は眼鏡を掛けていないからからか、レンズ一枚あるのとないのでは随分と印象が違って見える（それに直接見詰められると照れる）。その色が、笑い掛けるように優しく細まる。

「いや、…クリスマスが

…あッ、……」

慌てて口を押さえても、出てしまったものは取り消しが出来ない。焦って手を動かしたからテーブルにぶつけてしまって、地味に痛かった。カタカタツと細かい物が倒れる音に手元を見れば、……：そっか、俺、真咲さんとチエスやってたんだ、と今更になって思い出す（どうやら俺の脳味噌は、チエスの最中に急にどこかへ行っていたようだ）。

向かいに座る真咲さんは俺が言い掛けた言葉に微かに瞬いて、クリスマス？ と首を傾げた。それは単に、脈絡なく飛び出た言葉に、どうしたのだろうと思っっているような表情だった。

「…あ、えと、……もうすぐ、クリスマス…ですね、」

ちらと上目に見れば、真咲さんは特に不快な顔をするでもなく、そうだね、と頷く。そしてそっとチエステーブルに腕を置いて頬杖をつく、静かに俺を見ている ……不意に、ジュリアの言葉が甦る。【宗教に殺された】っていうのは、…。

「どこのお店も忙しくなるんだろうね、」

「あー…そうだ、…俺、バイト入ってるんだっ…」

……そういえば、そうだ。ずっと口を噤んで黙っていたからか、

乾いたカサカサの唇が張り付いていて、ぼんやり眩けば、開いた唇が引き攣った。

「よく働くね、丹は。」

イブもクリスマス当日も夕方から23時までだけど、一番混む時間帯だから嫌だ。きつとクリスマスだったら尚更（でもわざわざクリスマスに居酒屋に来るか？）。そもそもこの時期は毎日のように忘年会やら何やらあるからなあ…。

思わずぐったりしていると、真咲さんがおかしそうに笑って、でもさ、と慰めるように言う。

「駅前も凄く綺麗だよね。この時期はどこもきらきら光ってて、」

6

確かに、普段見慣れた街がこの時期だけはいつもと違って見えて、そこを行き交う人たちもわくわくしているように見えて、なんだか楽しくなる。街もいつもと違った熱気と活気に溢れているし。

「この近所も綺麗なところ多いしね。」

「俺、あの角の家、好きですよ、」

そこは白と青を基調にした、淡い光のイルミネーション。きらぎ

ら過激に存在を主張するようなところよりも、行き交う人たちの視線を自然と吸い寄せて、そっと寄り添うような繊細な輝きが好きだ。ささやかに光っていて、優しい気持ちになれそうな感じ。

真咲さんもどこの家のことか分かったのか、ああ、あそこの家ね、と思い浮かべるように頷いていた。

「あの……真咲さんは、何とも思わないんですか？……」

チエスの駒を並べながら、真咲さんはん？ と首を傾げる。伏せていた目をちらと持ち上げて俺を見た後、また視線を落とす。そして軽く息をつくように笑う。

7

「誰かに何か言われた？」

「えッ……」

俺が何も言えないでいると、真咲さんは分かったように、ふふ、とまた笑う。

「確かに昔は色々あったけど、…今と昔は違うからね。僕は昔より

も今の方がずっと、過ごしやすい世界になってると思うけど……」

「それは……」

それは、ヴァンパイアが迫害を受けるような世界になった頃より

……？

「ただ、」

駒を並べ終えて再び頬杖をつくとき、真咲さんは俺の顔を覗き込むように見上げた。その瞳のグレーは、談話室の照明の色の所為なのかどうか、うつすらと赤みを帯びて見えた。

「長く生きてると、時代の変化についていけない人もいるんだ。理解はしていても心がついていかない、と言えばいいのかな。……」

ヴァンパイアの寿命は、何百年何千年って聞いたことがある。そういう人たちは、大昔から続く戦争やその戦争の後のことと、両方の時代を知ってるんだ。

戦争と違って簡単に言うけれど、ただ歴史の授業でさらっと習うだけだから、何百年も昔に何が起こって何がどうなったのか、俺には見当も付かない。だけどヴァンパイアも人間も大勢の人が死んで、それがそれぞれに、何十年何百年後にも残るような憎しみを生んだのは確かだ。

人間の俺たちにはヴァンパイアの存在が知らされてないし（多分意図的に。だって今までは、完全に架空の存在として認識されていた）、きつとこれからの未来を担っていく子供たちも、そんな歴史の裏側を知ることはないんだろうと思う。

逆にヴァンパイアたちは、隠れるように人間に混じって密かに暮らしてる。

例えば赤羽館には、人間に対してあからさまな嫌悪を表す人はいないし、俺は今までに、人間と一緒に生活してるヴァンパイアやダンプールを沢山見てきた（彼らは抑制剤とかを服薬して、人間として暮らしていた）。そういう人たちのように、時代ごとに順応していける人と、そうでない人がいるんだ…。

なんとなく、ジュリアの哀しそうな横顔が思い浮かんだ。

ふ、と顔を上げると、真咲さんと目が合う。

グレーの瞳がそっと優しく笑っていた。なぜか、その笑みに釘付けになる ……俺はやっぱり、誰かが哀しんでいる顔よりも、

こうやって笑っている顔の方が好きだ。こうして、平和な時代に出会えて…良かった。

「イブの日も、遅くまでバイト？」

不意な言葉に、23時まで……と口を中途半端に開けたまま頷く。すると真咲さんが、じゃあ待ってる、と言って綺麗に微笑んだ。

向かいにあるその、綺麗な形で緩む唇を見ながら、俺はへ…と力の抜けた声を出していた。その後、顔が熱くなつて、急に動悸がしたようだった。

うわッ…えっと、その、なに、どうしよう?!

「折角だし、出掛けたい気分なんだ。綺麗なものを見に行こうよ。」

何か恥ずかしいやらよく分からないやら混乱して俯いてしまった俺を余所に、真咲さんはさりとて言う。

顔を下に向けたままそっと盗み見ると、真咲さんの視線はチェスボードに向けられていた。もうこっちを見ていない、それにホッとした（なんせ、あの目に見られたらどきどきしっ放しでおかしくなりそうなんだから）。

「あ、でもバイトの後じゃ疲れちゃうかな。」

「いッいえ全然!」

軽く吐息をついて首を傾げた真咲さんに、思わず叫ぶように言っていた。

ぱつと勢いよく顔を上げると、ちょうど目が合う。その嬉しそうに微笑む顔に、俺はぱつと顔面から湯気が出るんじゃないかって思うくらい、熱くなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7199z/>

Have A Happy Holiday !

2011年12月23日23時50分発行